生活の伝承15

発行者　民家園のつどい
会長　斎藤久一
発行所
福島市五老内町３番１号
福島市教育委員会文化課内
民家園のつどい事務局
TEL(024)535-1111 内線5373

南瓜が
芽出して
花咲いて
開いて
お胸をたたいて
きっきのき（じゃんけんぽんもある）キッキノキ

カボチャガ
メーダシテ
ハナーサイテ
ヒーライテ
オムネヲタタイテ

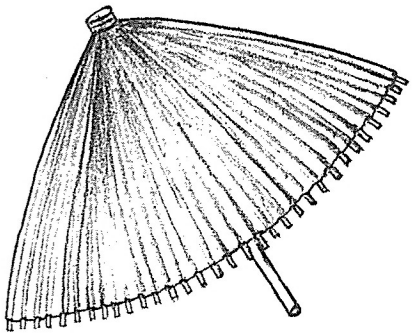
―会津地方のジャンケンの前うた―
会津地方ではジャンケンをキッキといった。
―あそび方―
はじめ　集まった者がこぶしを出す（南瓜が）
次に　こぶしの親指をおこして（芽出して）
次に　人指し指を伸ばして（花咲いて）
次に　掌を開いて（開いて）
お胸を四度たたいてから
きっきのきー　これはジャンケンをし、ここで勝ち負けがきまる。

伝えること

片平春夫

民家園に来られるお客さんに案内しながら説明するサービスが平成十三年度から始められた。その案内者ボランティアガイドの一人としてお手伝いをしている。ガイドの数がまだ少ないため、現在は総合学習の一環として来園する三～四年生の小学生たちが主なるガイド対象である。

子供たちを案内しているといろいろと戸惑うことも多い。昨年のこと、案内を始めた途端に雨が降ってきたことがある。思わず「コウモリを持ってるか」といったらキョトンとした顔をしていた。引率の先生に聞いたら「コウモリ」とは蝙蝠のことで



い現在は全て「傘」だけで区分の必要がなくなったのだろう。

民具類については子供の知らないものが多い。例えば火鉢などは誰でもが知っているかと思っていたが、ある小学校の約半数の子供たちは知っていなかった。火鉢を説明すると、火箸を、五徳を、そして炭をも説明することになる。さすがに子供たちも炭のことは知っていた。

炉端では付木に興味を示した。その使途を説明すると「オキ」のことも、ついでに「火消し壺」のことも説明するようになる。

冗句だったのか大釜を見てお風呂の代わりに入るといった子供がいた。お湯を沸かす、豆腐を作る、味噌を作るといった時代は子供たちにとっては大昔のことなのである。

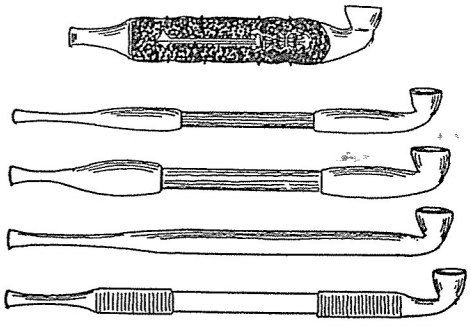
暖房機具として行火や炬燵のことになると豆炭のことも関連してくる。行火はお母さんの中でも知らない方が多く、子供たちの知っている炬燵とは電気炬燵のことで当然ながら置

「洋傘」のことは単に「傘」というのであった。自分達が子供の頃には「唐傘」に対し「洋傘」のことを「コウモリ」といっていた。「蛇の目傘」も「唐傘」もほとんど見ることのな

炬燵や掘炬燵を知らない。また炭を知っていても豆炭のことは知らない。

子供たちの知っている煙草は巻きタバコのことで、刻み煙草や葉巻の類は眼にしたこともないのが普通であろう。煙草を飲むに必要な「キセル」も、その掃除のことを「ラオ通し」といったことも、その為に撚る「コヨリ」のことなどの説明も子供たちにとって初めてであった。

部屋の四隅にある吊り手についての質問があった。蚊帳を吊る為と説明すると、蚊帳その物を見たこともないので知らないという、また蚊を



知っていても外に住むもので家の中に入って来るのが不思議そうである。まして部屋の中にもう一つの部屋を作るのが不思議でならないとのことである。「どうすれば良い」と聞いたら、「網戸にすればいい」との答えが返ってきた。尤もなことである。

「かまど」で御飯を釜で炊く、農村部の学校から来た子供たちは何とも思わなかったようだが、都市部の小学生にとっては珍しいことと写ったらしい。出来上がった御飯を「おひつ（又はお鉢）」に移して食卓に運ぶということは全ての子供たちにとって不可思議なことであったようだ。今はご飯を炊くのは電気炊飯器（電気釜とは言わないらしい）で、それから直接茶碗に盛りつけするようになり、「おひつ」を利用する習慣は無くなったのである。

筧家に「蠅取り器」があった。子供たちや若いお母さんには何をするものか分からなかったようだ。使い方を説明したら分かったようだが、蠅はブンブン跳ぶものと知っているが見たことが無いという子がいて、驚いたこともあった。ついでに「蠅帳」というものがあってといったら若いお母さんは理解出来ないようであった。電気冷蔵庫の普及で夏の食品保存は苦にしなくなったのである。

民家園で説明する生活用品と現在の生活で使用している生活用品の間には中間を飛ばした生活様式があり、連続性の感じられない生活環境の変化がある。わずか五十年そこそこの間にである。

生活用民具だけでなく農具もである。例えば「足踏み脱穀機」であるが、「千歯」から足踏み脱穀機までの変遷はよく理解出来るが現在のこととなると分からなくなる。バインダーからコンバインへ、そしてライスセンターへの米作りの機械化は、「見ることの出来た作業」が「目に見えない所で進められる」ように、「身近なことが手の届かないこと」になってしまった。現在の作業が見えないから農作業がどれだけ楽に便利になったのかを知ることが出来ない。

先日、町内会で民話を聞く会を催した。民話茶屋の会で活躍している友人のY・S氏にお願いして町内の子供たちとお母さん方に昔話を聞かせていただいた。

Y・S氏は福島弁で語り始めたが、ラジオ・テレビで暮らしている子供たちには聞き慣れないことで、分かりにくい話であったかもしれない。

鼻取り地蔵や狐に馬鹿にされ肥溜めに入る話、越中ふんどしでキナコを振るう話などが語られた。話の骨格をなす「鼻取り」「肥溜め」「ふんどし」が子供たちには何のことか理解出来ず、また大方の若いお母さんにも分からなかったようで、年配の方だけが笑って話を聞いていた。Y・S氏は少し説明を加えながら話を進めていたが、昔話の味わいが薄れたことは否めない。

Y・S氏は以前福島弁らしくない福島弁を聞き、自分が本当の福島弁を残さねばと考えて語り部になったというが、昔話が理解されにくい現状に戸惑い、昔話が本当に昔の話になってしまったと感じたのではなかろうか。

民家園のボランティアガイドを始めて三年、見学者の案内の中で経験したいろいろな事例について記してみた。近頃は特に伝えることの難しさをより感じるようになった。そして子供たちに接しながら、自分達も改めて勉強させられた。

なぜ伝承か、知らなくても生きられる、知ったからといってどうなるという人がいる。しかし今は以前から発展したものであり、以前を知らなければ、今の本当の姿を知って生きているとは言えないのではなかろうか。昔があってその影響を受けて現在があることを理解出来ると考えるのが人間なのではなかろうか。

私達は生活や生産の民具から、生活の智恵、創意と工夫、物を生み出す技術の素晴らしさを知らされる。

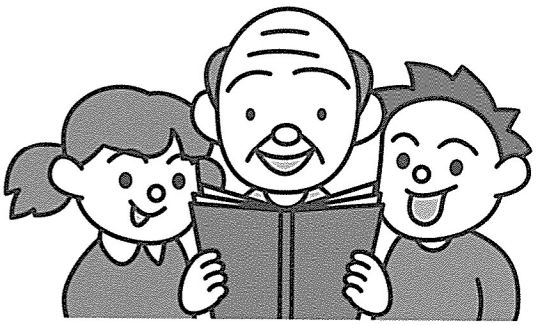
そして先人がそれを生み出すため如何に苦労し努力を重ねたかということを、我々は忘れてしまっている。今必要なことはその苦労と努力を今の世に生かそうとする気構えであろう。

昭和一桁生まれの自分達が育った少年時代の生活用具は、電気器具を除くと江戸末期から明治・大正・昭和と続いた約百年の間にさほど大きな変化はなかったような気がする。だから特に親達に聞かなくても自然に体験したことがそのまま生活の歴史を知ることに通じていた。ここ五十年たらずの間に世の中はすっかり変わってしまい現在の生活ではそれらの道具を必要としなくなった。どんな用具でも一つ一つ教わらなければ昔の生活を知ることが出来なくなっている。

今生きている者は両親から両親の過ごした時代のことを教わり、そして今生きている者が今の歴史を作りそれを子供に伝えてゆく。こうして子から孫へさらに子孫にと伝えてゆくのが伝承である。

今生きている自分がその役割を果たしているのか、と問われたら自信を持って「ハイ」と答えるのにためらってしまうが、「昔は現在に繋がっている」ことを自覚し今後も伝える努力をしてゆきたいと答えてみたい。

そして先人の努力を知り現在を知る、温故知新とは「先人の苦労に感謝し、現在に感謝して生きること」これを伝えるのが『民家園のつどい』の努めと思うのである。



会員の研修に対する一つの提言

秋山政一

「民家園のつどい」には創立以来続いている会員の研修行事として、各地の歴史・民俗等の見学行事がある。

その都度の成果はあって収穫の多い研修行事であった。

ところでつどいの研修について、今までの研修成果の上に、次のような提言を試みることにする。

それは、民家園に保存されている「映像フィルムとカセットテープ」の利用による研修を行ってはどうであろうか、という提言である。

その前提としては、記録されたテープ等の確認を行ない、年別、行事別などの分類と共に、永く保存されるための目録を作成し、一つは在来行なわれている、展示館においての公開は継続して行なうこととしながら、期日を定めてつどいの会員に集会してもらい、質問や討論によって、相互の研修としてみてはどうであろうか。

研修として映像を見て、各が行事の進行その他に疑問が出た場合は、相互の討論か、助言者がいたときは指導をうけることが、一人一人の自覚と認識を深めることになりはしないであろうか。

この、新研修が行なわれるためには、現に記録収蔵されている映像資料の目録の整備と保存についての準備がなされなければならないことは云うまでもないことである。

福島 平成十六年の民俗

加藤 重芳

馬献上

昔　旧暦七月　福島では新しくとれた麦藁で藁馬を作る慣わしがあった

七日に作る七夕馬　十三日には先祖迎いの盆馬又馬を飼っている家では馬頭観音を供養し　飼馬の健康無事を祈って馬屋の屋根に上げる

七夕馬と馬頭観音の馬は牝牡対に作る

盆馬は一頭のみ又は迎いる仏様の数だけ作る

それぞれの思いを込めて　それぞれの型に作る

子供の願にまかせて　子供が乗れるような大きな丈夫な馬を作ることもあった

八月朔日幕府より朝廷に馬を献上する行事

農の初め（ののそめ）

歳神様として山から家に迎えて正月行事を終えた

形代の松を　田の神として　今年の稲作の始めに田圃（神田　向田　前田）に移して　今年の豊年を願い　仕事始めの田起しを行う行事

近年見ること希になったが　福島市では水原・松川・平田など南部地域に未だ継続されている

唱　言（となえごと）

一鍬掘ってはザックリショ

二鍬掘ってはザックリショ

白金黄金がザックザク

〃三遍唱える〃

山田戸の内所見

藁宮　仮宮　おかりや

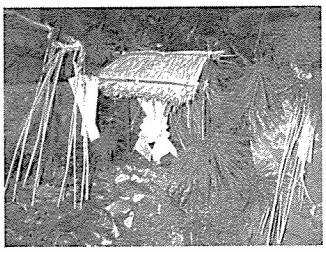
重陽の節句旧暦九月九日　九月十九日は中の節句　九月二十九日は末の節句に田の神に感謝して餅を供える行事

その日藁宮を造って田の神を迎える

秋の本祭りを行うまでの短い間の御宮なので　簡素な造り方が本来の趣旨であるが　近年石宮に替わるところが多く見られるのは　産土神と混同されている所以かとも思われる

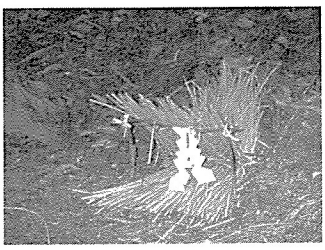
市内南部に散見される

水原　宇輪台



田沢　羽山神社

松川　狐水稲荷



水原　遠谷地

昭和も遠く……
日記で視る『ある青年』の年こし

村田精治

夜学に通う青年の昭和十年の日記である。
保原の金原田で祖父母、両親、弟との六人家族の様だがはっきりしない。年令不明、未婚。父と農作業に専念する。

一月一日　四方拝　旧十一月二十六日
あらゆる方面で　めぐまれなかった昭和九年度もすぎて非常とさけばれて二千五百九十五年と相成りました……
たのしい正月と言いたいが　たのしいとは外面だけで内面はだれもかなしいでしょう、今日は雪が降ったので縄もじりする、よいから降り出した雪は朝の八時までには　まさに一尺四分という大きな雪となった。

一月二日　旧十一月二十七日
起床は六時　今日は縄もじりする　御父さんは俵つくりする、または米つめる　新しい米の米俵入れてしまう、四斗入り二十五俵　内十二俵一斗八升小作。

一月三日　旧十一月二十八日
今日も縄もじり　今日は曇りがちな日よりだった。

一月四日　旧十一月二十九日
起床七時　朝起きてから小し火にあたり田の青田あくふりに行く　三俵田麦にかけてから田植縄もじりする　御父さんは藁すぐり…

一月五日　旧十二月一日
かっぱれ一日で休　こたつに入って講談雑誌読んで遊ぶ　朝はかっぱれ一日で　てろ餅てろ餅するのであるが　あづき飯たべる。

旧正月まで一月間ある。この間米搗き、売物の凍り草餅作り、合間に藁作業（縄もじり、こでな縄もじり、荷縄もじり、田植縄もじり、こもあみ、ぼっちこしらい、俵作り、みの作り、猫みの作り、じょうり作り）がある。
夜学にも通う。

旧十二月二十九日　新二月二日
前日「米うるかし」　この日は「起床は五時半　今日は朝から餅つきする三斗」　又「屋敷に新年宴会のふれ」「宴会は旧正月一日」

旧十二月三十日　新二月三日
「起床は六時」「じょうり作りしたり餅ついたり」

旧一月一日　新二月四日
「今日は旧正月の一日で休　元日拝りやらない　餅切る」

旧一月二日　新二月五日
「夜よいゆめを見るとよいとかで紙で舟こしらいて枕にしてねる」

旧一月三日　新二月六日　「夜　節分で豆まき」

旧一月四日
「乗履（じょうり）作る」

旧一月五日
「除履作る」

旧一月七日　新二月十日
「今日は七草雑煮で休　長岡の天皇様に御拝りして来る」

旧一月八日　新二月十一日
「午後から同級会あるので学校に行ク　会ヒ二十銭　今日はゆかいに歌又遊んでくる」

旧一月十一日
「今日農初めで休　松送る」

旧一月十四日
「餅つきす　今日はだんごさしする」

旧一月十五日
「鳥追い　三時に起きる」（二時の予定）

親の顔を見てみたい

熊本俊光

タイトルにこのように書くと、民放テレビのワイドショウ番組で、未成年の餓鬼共が悪さを働き社会に迷惑をかけた子供の親はどんな躾をして子供を育てたのであろうかと、そんな阿保な親の顔を見てみたいと言うことではないだろうかと思う。私がこれから書くことは、これとは正反対のことである。

私は先輩各位と何回かの実施指導をへて、昨年四月に漸くガイドとして一本立ちし、毎週水曜、日曜の二回が私の担当ガイド日になっている。主に民家園を訪れるのは、小学三年生の社会科教育課程の昔のくらしと言うタイトルで、今から百年以上前の江戸時代における民家や民具の種類等について勉強するために来園されるのである。

さて、本論の親の顔を見てみたいと言うことであるが、昨年七月に猪苗代町立長瀬小学校三年生約三十名が担任の女教師と男性教頭の二名に引率されて来園された時のことである。十五名宛の二班に分かれ、私は女先生と第一班を担当することになり、早速園内略図板の前に立ち、開園以来二十周年を経過し江戸時代から明治初期にかけての民家、芝居小屋、宿店、料亭等が移築復原されているほか生活生産用具を展示してある旨を説明した。

園内を案内していくと、松林の園内道路脇に屋敷神として八体のお地蔵様が祀られているが、丁度その時の出来事である。

生徒達はガヤガヤ騒ぎながら私のはるか前を歩いており、残ったのは私と女先生と男の子の三人である。男の子はお地蔵さんに額ずくとそこには一円硬貨が大半を占め、たまに五円が見られる程度のお賽銭があげられていた。男の子はポケットから小銭入れを出し、そこから百円硬貨を取り出し拝むのである。その時私は百円とは豪華なものだと一瞬吃驚した。すると先生は、

「〇〇君、そんなに沢山あげて大丈夫。これから、四季の里でお昼なのに。」

すると男の子は、

「僕は最初からこういう所にあげるのに持って来たんですから、先生大丈夫です。」と、私はこの一言に穴があったら入りたい心境であった。

子は親の背を見て育つと言うから、常日頃の親子の愛情や固い絆に結ばれてこのような立派な子供が育ったのではないだろうかと思う。なんといってもこの子を育てた親の顔を見てみたいと思ったこの日のガイドの一時間半は、気分も軽く心地よい時間の経過であった。あの男の子の未来に栄光あれと大声援を送りたい。

『ボランティア交流会が行なわれました』

・月　日　平成十五年六月四日
・見　学　午前十一時～正午
・交流会　午後一時～二時
　旧馬場家にて

昨年、宇都宮市の旧篠原家住宅保存会の皆さん十六名が、民家園を見学に来ました。

旧篠原家は、江戸時代中頃から醤油醸造業や肥料商として繁栄した豪商で、主屋と新蔵が国の重要文化財に指定され、文庫蔵などが市の有形文化財に指定されています。

保存会は、常時会員が旧篠原家にいて、施設ガイドなど見学者への対応や行事の実施、清掃など保存活用に努めているボランティア団体です。

昨年二月、つどい研修会で同家を訪れた際、保存会とつどいとの交流会ができればという話があり、今回実現したものです。

見学では、民家園ボランティアガイドが園内を案内し、交流会では、お互いに施設ガイドや行事運営に携わる中で感じていること、今後の活動のあり方、施設に対する思いなどを話し合いました。

つどいの皆さんにとっても、このような交流会を持つことは、各地を見学する以上に有意義なものとなるのではないでしょうか。今後も、機会があれば実施していきたいと思いますので、積極的な参加を期待いたします。